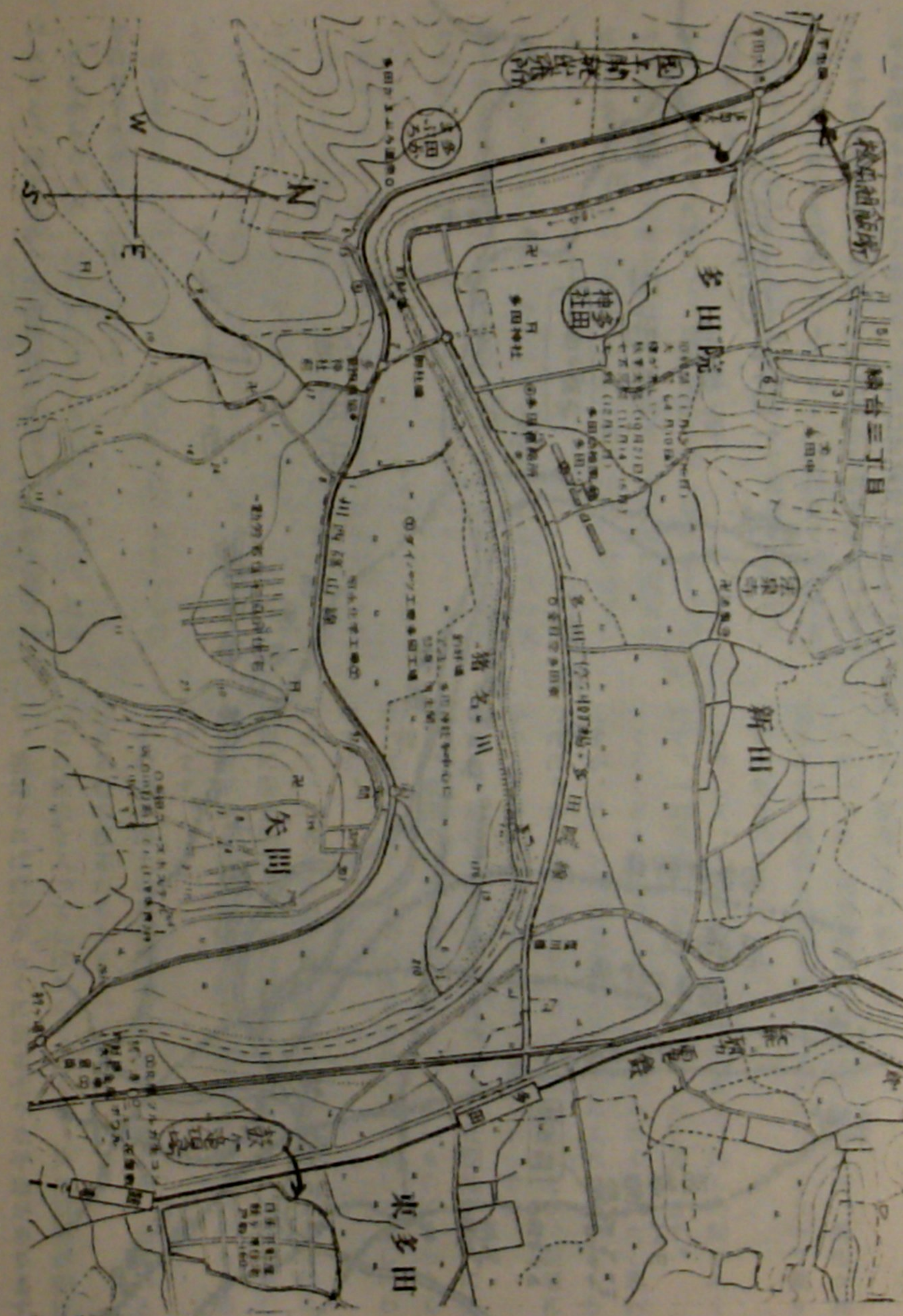




この平地が、国土開発の資材置場兼貯場村で、私たちの飯場があった所です。大橋から飯場までは二百メートルあったでしょう。

実はこの二百メートルが問題になるのです。

と言うのは、国土の事務所は道路沿いなので、電話をすぐ引けたのですが、飯場はもとと人家のなかった所に建ったので電話架設が出来なかったのです。

電話を引くには多田大橋から飯場まで二百メートルの架設費用が余分に必要で、それはかなりの金額になるのです。

その費用は国土開発からは出ません。かといって松本組にも負担能力がありません。

平山親父は

「電話は絶対必要」

と頑張ったのですが、事情を知ったあとは沈黙してしまいました。

交通が不便で、電話も引けないとなると、その影響は少さくありません。

多田から尼崎への電話は、国土開発の事務所へ行けば、好意で使わせてくれます。しかし用事の内容によっては元請けに聞かれないときもあります。

そんなときは、煙草屋の電話を借ります。とはいえ、夜中に急用が出来たらそうはいきません。

尼崎から多田への連絡はなおさらです。急ぎの用事が間にあいません。

たとえば、尼崎の方で工事の都合で多田から応援の手が欲しいと思いつき、電話があれば前夜おそくとも連絡がありますから、こちらもそのつもりで仕事の段取りをします。

ところが当日の朝になって、いきなりマイクロバスで迎えに来て、こちらの仕事におかまいなしに連れていかれてしまうので、段取りが狂ってしまうのです。

その逆もあります。こちらがヒマで仕方がないのに、前触れもなしに何人もの土方をマイクロバスが運んで来たりするので。

そんなわけで連絡が一方通行になりがちですから、毎日何へんもこちらから電話をかけねばなりません。

その電話が私の役目でした。

平山親父という人が大の電話嫌いなのです。

ふだんの世間話、昼休みの無駄話、喧嘩のときの悪口雑言やら、快活明朗であり、勇ましくもあり、舌もなめらかなのに、一寸改まった所へ出ると、舌がもつれてしまうという人でした。

そして電話のダイヤルを回すのが苦手なのです。

姐御も口八丁、舌八丁の男まさりなのに、国土の事務

所などへ顔を出すのは、
「女の身として……」
遠慮すべきだということです。

仕事を終えて帰ってくる。飯もそこそこに帳づけの仕事にかかると、それがまた面倒な仕事なので時間がかかる、いらいらしているところへ姫御が顔を出すのです。

「善ちゃん、尼に電話したってんか」

何の用事かと聞くと、明日、米屋に払う金がないから「兄ちゃんに言うてや」

なのです。外はすでに真っ暗なのに、みぞれさへ降っているのです。

懐中電灯をもって飯場を出ます。こんな用事は国土の電話を借りるわけにはいけないので、近い煙草屋まで傘をさしてトボトボ。

そんなときは

「何で俺がこんな電話かけんならんねん」

と腹が立ってなりませんでした。

多田へ来てから帳づけの仕事もふえました。

元測けの国土開発へ日報を三種類、月報を二種類提出することになったからです。

松本組ではその前後に事務員を雇い入れました。でっぶりと恰幅のいい渡部という人で、口ヒゲまではやしてい

るので、松本親方と並ぶと、こちらの方が社長に見えました。

しかし、渡部が入ったことで、私の帳づけがらくになったわけではありません。渡部は松本組全体の経理、労務、外交までやるのですが、多田関係は一切私にまかせきりです。

今まで、尼崎にいたときは、平山飯場だけの出面（出勤簿）をつけ、月二回のべ切りに給料の計算をするだけだったのですが、多田へ来てからはそれだけではすみません。

国土開発への日報、月報提出のことは前に書きましたが、翌日の仕事の段取り、人員の配置、資材の点検、注文、飯場での必要物資の購入など、毎日毎日、ホッとするヒマもないのです。

その忙しさを見かねたのか、渡部が松本親方に言ってくれました。

「善ちゃんに小部屋を一つこしらえてやったらどうですか。大部屋の隅では帳づけの仕事は出来ない。酒を飲んだり、マージャンをやったりしている傍では、事務は捗らない」

しかし、スペース的に無理だということでのこの提案はみのりませんでした。

道路巾などに大きく影響します。

毎日掘ったり埋めたりしますから、毎日測量しなければなりません。そうしないと翌日の仕事が出来ないので

掘り方やコンクリ打ちなどしている仲間は小間割りで早く帰ることもあるけれど、測量はその後に残って仕事を

するので、残業や早出もあります。だから、仲間たちがとっくに入浴し、一杯やってくつ

ろいである頃にもどって来て、食事をし、事務にかかる。その間に尼崎へ連絡の電話とか、雑用もあるのです。

平山姫御が胃ケイレンになったり、本田の息子が盲腸になったりという事件もありましたが、そんなときに救急車を手配したりするのも私の役目です。

帳づけの仕事が終わってホッとした頃には、風呂もすっかりさめていて、入り損うこともしばしばでした。松本から二千元、平山から二千元の帳づけ手当が出

ましたが、それ位では引き合わない仕事です。電話代はほとんど自腹でしたし、月に何度かは尼崎に帳面合せに帰らなければならぬ交通費も自弁でした。今から思えば、
「我れながらよくやったものだ。あの頃は若かったんだなア」ということになります。

すると渡部は

「それなら善ちゃんを現場の仕事から解放して、帳づけ専門にしてやらないと体がもたないんじゃないか」

と言ってくれました。

嬉しかったです。

（判ってくれる人が、一人は所かにいる）

という嬉しさでした。けれども、

（これもダメだろう。松本親方がそんなことを許可する筈がない）

アテにはしませんでしたので、

「人手不足だから……」

と予想通りの返事にも落胆はしません。

「そのかわり測量手元を専門にせいや」

ということになりました。

渡部は

「それでも善ちゃん、少しは楽になるだろう」

と言うのですが、これがウラ目でした。

平山の帳づけをするようになってから、掘り方などには頼らなくなっていたので、測量手元専門といっても、それ以前と少しも変わらないわけです。

それに宅地造成の仕事は、測量が最重要なのです。土羽の丁張りが十センチ違っただけでも、宅地面積や